

# 日本の昔話研究における北の視点

斎藤君子

国境が存在しなかつた時代における人の移動や文化の伝播は現代人が想像する以上に活発だったようだ。最近の人類学における遺伝子レベルでの研究成果や、相次ぐ考古学上の発見を見ると、改めてこの思いを強くする。従来、我が国における昔話の比較研究は、韓国や中国から東南アジア、オセアニア、あるいはインドへと、南方へ目が向く傾向が強く、北方に対する関心は概して薄かったと言わねばならない。今後は口承文芸学においても、比較のための資料をできる限り広い地域に求めることが必要だろう。

日本の昔話を研究する上で、筆者がシベリアに注目する理由は二つある。一つは、シベリアに限らないが、狩猟採集によつて生活してきた民族においては、人間にとつてもっとも切実な願いが口承文芸に凝縮されて今日まで伝つてきたからである。彼らの伝承を知ることによつて、昔話とはなにかを知る手掛かりが得られるのではないかと考える。

第二の理由は、シベリアには地続きの韓国や中国はもちろんなこと、日本や新大陸の話とも共通するものが少なくなく、環太平洋における口承文芸の成立や伝播について論ずるうえで無視できない地

域だからである。だが、伝播を問題にするとき忘れてならないことは、外國に似た話がある場合、それがたとえ隣国であつても、即、伝播とみなすのは危険だということである。昔話の世界にも「他人の空似」はありうる。重要なのは、個々の民族においてその昔話がいかなる信仰や儀礼と結びついて語られてきたかを明らかにすることだろう。

このような観点から、「鼠淨土」「大歳の火」「稻葉の素戻」の三つの話型を取り上げ、シベリアとロシアの類話を提供し、個々の民族的特徴を明らかにしたい。

## 一 「鼠淨土」

シベリアには初秋、鼠と物物交換をして食料を手に入れる習俗がある。女たちが鼠の穴へ行き、鼠が冬に備えて貯えはじめた根菜などを頂戴してくるのだ。これは略奪ではなく、正当な交易なのだと考えられているところがおもしろい。鼠の穴を訪れた女たちは礼儀正しく鼠に挨拶する。そして、もつていった布切れなどを置き、そ

れと交換に食料を頂戴してくるのである。ここでは人間と鼠はまったく対等な、共存共榮の関係にあり、共に厳しい冬を乗り越えなければならぬ仲間である。したがって、この交易は秋口にしか行わなければならない。その時期であれば、鼠はもう一度食料を集めなおして冬に備えることができるからだ。この風変わりな食物採集方法はシベリアに住むロシア人の間にも広がっていて、手に入れたニリ根などを壺にいれ、ペチカで蒸し煮にして食べる。

日本で鼠との交易が行われていたかどうかは知らないが、それに近い発想はある。徳島の祖谷では「鼠さんのおかげで茶が飲める」とい、鼠に感謝して茶を飲む習わしがある。鼠には石垣の隙間に食料を保存する習癖があつて、そこからお茶が芽を出すからだ。鼠が実を摘んで植えたお茶を人間がいたたくのである。

こうした習俗から「鼠淨土」を連想するのはわたしだけではないだろう。両者には同じ発想が認められる。もちろん、「鼠淨土」がシベリアから日本に伝播したというのではない。シベリアの習俗と日本昔話が鼠に対する共通の観念に支えられているということであり、日本の資料からは気づかなかつたことが、シベリア諸民族の習俗や伝承を重ね合わせることによつて、見えてくる場合があるといふことである。

ところで、日本には「鼠淨土」型の「繼子話」があるが、シベリアにもそれとよく似た昔話 (CYC<sup>(1)</sup> 480) がある。次に要約するのはヤクートの話である。<sup>(2)</sup>

おじいさんは娘が二人いたが、下の娘ばかりかわいがり、上の

娘はどういうわけか、かわいくなつた。おじいさんは上の娘をやつかい払いしようと考へた。わずかな穀物をもたせて森へ連れて行き、空き家に置き去りにした。娘が小屋で粥を煮ているとオコジョがきて、粥を食べさせてくれといった。娘が粥をやると、オコジョが言つた。

「今晚、この家にシリクン（水中に住み、家畜を飼育している妖怪）が集まつてきて賭け事をはじめるから、炉のかげに隠れていて、マッチをすれ。そうすれば娘はあわてて逃げ出すから、お金をもらえ」

娘はオコジョに教えられた通りにして大金を手にいれて、家に帰つた。これを知つた両親は今度は下の娘を森の空き家へ連れていった。ところがこの娘は根性が悪く、オコジョに食べ物を分け与えようとしたしなかつた。やがてシリクンたちが賭け事をはじめると、オコジョが娘の体をくすぐつて笑わせるので、娘はシリクンに見つかつて食われてしまつた。

ここでは主人公の援助者としてオコジョ（イタチ科の動物）、贈与者としてシリクンという魔物が登場するが、他の類話ではオコジョの代わりに鼠、シリクンの代わりに熊が登場するのがふつうで、主人公は熊とかくれんぼ、あるいは目隠し鬼ごっこをし、鼠の援助で勝つて褒美をもらう。

ヤクートの場合、主人公は繼子より実子のことが多い、そこには娘の誕生を喜ばないヤクートの風俗が影を落としているといわれる。また、E・M・メレチンスキイは、繼子より実子を主人公とする話

の方が起源が古く、成人した娘を両親と別に住まわせる習俗を反映していると述べている。

この型の昔話はサハ共和国（旧ヤクート共和国）全土に分布し、ヤクート的脚色が巧みにはどころかされているので、一見、古くからヤクートに伝わる昔話であるかに見えるが、Ju·N·ジャコーノヴァによると、ロシアからの受容だという。この説が正しいとすると、ヤクートの話が親のロシアの話よりも日本の話にはなぜだらうか。「他人の空似」なのか、それとも「従兄弟似」なのだろうか。それとも、ヨーロッパの話がシベリアと日本に別々のルートで伝わったのだろうか。この点に関しては今後の研究を待ちたい。

## 二 「大歳の火」

日本には大歳の晩の来訪者をもてなした主人公が福を授かる一連の昔話があり、「大歳の客」「猿長者」「宝手拭い」「弘法機」「大歳の火」など、いくつかの話型が知られている。ここでは「大歳の火」を取り上げ、海外の類話と比較したい。

「大歳の火」は新年を迎える日本の行事や婚姻の儀礼と密接な結びつきをもつており、日本の雰囲気を漂わせた話である。近隣諸国に類話を探すと、中国には「猿長者」や「宝手拭い」は豊富にあるにもかかわらず、なぜか火種との結びつきや、客の屍が黄金に変わるモチーフを含む話は知らない。<sup>(3)</sup>

一方、韓国にはわが国の「大歳の火」にかなり近い話で、「火の

種」型と呼ばれる、次のような話がある。

三代火が続いている家があり、そこに嫁がきて火の管理を任せられるが、火が消えてしまう。夜中に嫁が見張っていると、黄色い上着に赤い下着を着た女の子がやってきて、火を消す。女の子の後を追い、姿を消した場所を掘ると、銀がはいった壺が出る。

この話は昔話であると同時に、伝説としても語り伝えられており、韓国では実際にあつたできごととして信じられている。<sup>(4)</sup> 黄色い上着に赤い下着を着た女の子は火の神そのものであると同時に、火をたいせつにしている家に福をもたらす来訪神でもある。

韓国の「火の種」と日本の「大歳の火」は、代々火を絶やしたこのない家へ嫁いできた嫁が火を消してしまうこと、火種が消えることは家が滅びることを意味すること、黄金化生による福の招来など、大筋において一致する。しかし、無視できない相違点もいくつかかる。まず目に付くのは、日本の話が大歳と不可分に結びついて語られるのに対し、韓国にはそれがないことである。また、日本の話では歳神がみすぼらしい老人に身をやつして現れるが、韓国では火神が赤い服を着た女の子になって現れる。さらに韓国の話では火を消すのは火神自身であり、日本の「大歳の火」の主要モチーフともいうべき、嫁が火種を探しにいき、死人を預かるモチーフは見られない。このように両者はかなり近い話ではあるが、まったく同じ話とみなすには無理がある。

ここでアジアからヨーロッパに目を転じることにしよう。日本から遠く離れたヨーロッパに、不意の来訪者をもてなした主人公が富

を得る話が豊富にあるのはおもしろい。三つの願いが叶う「大歳の客」型(ATT 750 A)や、朝の初仕事が一日続き、家じゅう麻布でいっぱいになる「弘法機」型(ATT 750 C)はヨーロッパ全体に分布している。<sup>(5)</sup>

なかでも日本の「大歳の火」との関係で注目したいのは、バルト諸国と東スラヴに分布する「黄金の炭をもつおじいさん」(CYC 751 B\*)である。リトワニア在住のロシア人が語った「嫉妬深い金持ち」という話を要約しよう。<sup>(6)</sup>

一人の百姓が住んでいて、その近くに金持ちがいた。ある日、百姓は家に火がないので、息子に金持ちの主人のところへ火をもらいに行かせた。息子はあるいていくうち、おじいさんが座つて火を焚いているのを見た。おじいさんは事情を聞くと、「服の裾にくるんで、もつていけ」と言った。「服が燃えてしまう」と言うが、それでもおじいさんが「もつていけ」と言うので、炭を服の裾にくるんでも帰つた。ところが家に着いてみると、炭が金になっていた。喜んだ百姓は女房をつれて市場へ行き、買い物をして舞踏会を開いた。隣りの金持ちがそれを知り、娘を百姓の家へやつて事情を聞き出すと、家じゅうの火を消させ、いちばん丈の長い上着を着て出かけた。金持ちがおじいさんにお会い、「炭をください」というとおじいさんが、「振り返つてみるがいい。おまえの家はすっぽり火に包まれている」といった。金持ちの財産はすべて灰になってしまった。

東スラヴのタイプインデックスによると、類話の数はロシア四話、ウクライナ七話、ベラルーシ二話、東スラヴではあまりポピュラー

な話ではない。この話型がもっとも多く記録されているのはバルト海沿岸諸国で、リトワニア一五話、ラトヴィア二一話である。エストニアにも類話があり、R・ヴィーグレップは神話的伝説とし、次のように要約している。<sup>(8)</sup> 「悪魔が森で焚き火をして宝物を守つていると、貧しい男がそばを通りかかった。悪魔がこの男の前掛けに燃えている炭を入れると、それが金貨に変わつた」。

ところで、前述のリトワニア居住のロシア人語り手はこれがいつの日のできごとかについて何も語っていないが、類話を調べると、その多くは特定の祭日と結びついている。なかでもいちばん多いのは復活祭の晩とする話である。ロシアのヴォログダ州で記録された話を要約しよう。<sup>(9)</sup>

神聖な復活祭の晩だというのに、主人公である貧しい弟の家には食べるのもなければ、火をおこすものもない。せめて火だけは焚きたいと思って、兄の家に炭をもらいにいくが、兄はくれない。弟が火を求めて泣いて歩いていると、野原で火を焚いて座っているおじいさんがいた。主人公が炭を分けてほしいと頼むと、おじいさんは「その上着をここに敷け。炭を入れてやろう」という。男はおじいさんから炭をどっさりもらひ、家に持ち帰つて床の上に置いた。すると炭が金貨になつた。金貨を計らうと兄のところへ升を借りて行くと、兄は升の底に油を塗つて弟に貸した。兄は弟が金貨を手に入れたことを知ると、自分も出かけていき、炭をもらって家の中にばらまいた。すると家が焼けてしまつた。

ベラルーシの類話も粗筋はほぼ同じで、キリストの日、すなわち

復活祭のできごとになつてゐる。<sup>[10]</sup>

ウクライナのザカルパチエ地方で採録された「二人兄弟」と題す  
る話では、いつのできごとなのか明言されていないが、話の内容か  
ら推察すると、一年の重要な節目にあたるクリスマス、ないしは復  
活祭のできごとと考えられる。

主人公は二人兄弟の弟で、十二人の子をもつ貧しい男である。金  
持ちの兄に雇われ、なんとかその日の食い扶持を稼いでいるが、あ

る日、ペチカに火をつける一本のマッチすらなくなってしまう。火  
をもらい歩いていくと、十二人の男たちが森で大火を焚いている。  
「家で十二人の子どもたちが腹をすかせて凍えている」と話すと、

十二人の中のいちばん年長の男が炭をくれる。それを家に持ち帰る  
と金貨になる。兄が弟の真似をして十二人の男たちのところへ出か  
けて行き、「子どもはいるか」と聞かれ、「いる」と嘘をつく。兄が  
炭をもらつて帰り、家の中央にばらまくと、火事になつて家が焼け  
てしまう。

マルシャークの「十二月」を連想させるこの十二人の男たちは一  
年の各月を支配する神々である。もう一話、同じくウクライナの話  
で十二月が登場するものがある。<sup>[12]</sup>

貧しい男が金持ちのところへ火を借りにいくと、金持ちは「十二  
人の月のところへ行って、火をもらえ」と言う。貧しい主人公は教  
えられたとおり十二人の月のところへ行き、「王は蘇り給えり！」  
と挨拶すると、十二人の月は「まことに蘇り給えり！」と挨拶を返  
し、「どの月がいちばんいいか」と尋ねる。男が、「六月と三月」と

答えると、二人の月が男の上着の中に炭を入れてくれる。男がその  
炭を家に持ち帰ると、金貨になる。それを知った金持ちは自分の家  
の火に水をかけて消してしまい、十二人の月のところへ行つて火を  
もらつてくるが、その火で家が焼け、妻子が焼死する。

主人公と月との間で交わされる、「主は蘇り給えり！」「まことに  
蘇り給えり！」という言葉はキリストの復活を祝福する挨拶で、こ  
の話が復活祭のできごとであることを示している。<sup>[13]</sup>

グニエージチがウクライナで記録した類話でも、事件は復活祭  
の日曜日に起きる。しかも、主人公が求める火は日常生活で用いる  
火ではなく、祭を祝うための、いわば聖なる火である。

つましい暮らしをしているひとりの男が復活祭を待ち望み、教  
会へ行つて司祭と復活祭の挨拶にキスを交わし、家に帰つてきた。  
家で灯明を灯し、香を焚こうと思つたが、火がなかつた。隣家へ火  
をもらいに行つたが、くれなかつた。村はずれに火が見えたので  
行つてみると、行商人たちが焚き火をしていた。復活祭の挨拶を交  
わし、「祝いの焚き火の火をください」と頼んだ。

これから先の展開は周知のとおりで、主人公は火と金を手に入れ、  
これを真似た隣人は家を焼失する。

このように、東スラヴでは「黄金の火をもつおじいさん」の類話  
の大部分は復活祭に起きた奇跡を語り伝える宗教伝説的性質をもつ  
ている。なかにはクリスマスの夜のできごととするものもある。N  
・E・オンチュコーフが北ロシアで記録したもので、そこには他に  
見られないモチーフも含まれていて、この昔話の本質を知るための

貴重な手がかりになる。話を要約しよう。<sup>(14)</sup>

貧しい百姓がクリスマスの夜、ペチカを焚くために火種をもらいに近所の家を歩き回つたが、だれも分け与えてくれなかつた。隣り村へも行つたが、断られた。一軒の小屋へ行くと、ペチカが焚かれ、死者が横たわつていて、他にはだれもいなかつた。男は神に祈りを捧げて死者を起こした。すると死者がむづくり起き上がつた。男はこの家の火種をもらい、ひしゃくに炭をいれて家に持ち帰つた。そして教えられたとおり、炭をテーブルの上にあけると、炭が金銀になつた。

このあとは例によつて隣人が真似をして、家を焼失する。

クリスマスの晩に蘇り、貧者に火と富を分け与える、このふしぎな死者とはいつたい何者だろうか。その答えをロシアの年中行事に探つてみよう。

### スラヴにおける大歳の儀礼と復活祭

周知のように、スラヴ民族においては異教時代の民間信仰や儀礼がキリスト教に吸収されて生き残り、クリスマスには冬至、復活祭には春分の儀礼のなごりが認められる。かつて彼らは冬至、春分、夏至といった太陽運行の重要な節目ごとに繰り返し地上で大火を焚き、天上の火である太陽を崇拜し、家の火を更新してその力を強めようとした。

まずクリスマスの儀礼と火との関係から見てみよう。イヴから二日間、各家庭ではペチカで大火を焚く習わしがあり、この燠や灰

には病気を治し、落雷や悪天候から家を守る力があるとされる。この火をもつて家や屋敷の周囲を回り、烟にばら蒔いたり、春まで保存しておいて、烟を耕す人が食べるパンを焼くときに釜にくべたり、薬として用いたりした。<sup>(15)</sup>

また、クリスマス週間には若者組みが変装して家々を回り、種穀を一握りずつばら撒いて、豊穣と一家の健康を祈願してあるく。特に注目したいのは、若者が体に白い布を巻き付けて死者に変装する北ロシアの習俗である。鼻にカブをぶらさげ、口に松明をくわた「死者」に向かつて弔いの歌をうたう。四人の死者を家の中に運び入れて隅に寝かせ、火のついた松明を死者の口にくわえさせ、「照らせ」と唱えるところもある。これは祖靈が神聖な火をもつて来訪し、その火で照らすことによつて一家の幸福を約束するものである。<sup>(16)</sup>

また、クリスマスの晩に一家の主人が甘露水のはいつた深皿を持つて家の周囲を回り、壁をノックすると、家の中で「ノックするのはだれですか」と問い合わせ、主人が「神自身」と答える地方もある。この習俗もやはり祖靈の来訪を意味するもので、豊穣をもたらすための儀礼である。

大火は復活祭や夏至祭りにも焚かれる。復活祭は春分のあと最初の満月の次の第一日曜日に催されるもので、教会の儀式は聖職者を先頭にした信徒の行進ではじまる。手に十字をもつて教会の回りを一周し、教会の入り口まで戻ると、聖職者が「主は復活し給り」と宣言する。教会のそばで焚き火をするための薪の準備をして

おくのは男たちの仕事だが、ザカルパチエ地方のウクライナの人間にはこの日の薪を盗んでくる習わしがある。<sup>(17)</sup> 「火盗み」は創造神話の重要な構成要素として世界的に知られているが、このウクライナの習俗は神話の世界を再現しているようでおもしろい。

復活祭の晩は既婚男女のグループが家々を回り、窓の下で儀礼歌をうたつて一家の健康と幸福を祝す。

復活祭は祖靈信仰と深く結びついていて、魔物や死者が姿を現すときでもあり、早朝の祈禱の際に点火したロウソクをもって屋根裏部屋や鐘楼に登ると、ドモヴォイ（家の靈）の姿を見ることができるといわれている。また、他の信者が十字をもって教会の回りを行進しているときに、こっそり教会の祭壇の陰に隠れていると、教会の中では死者たちが祈りを捧げ、復活祭の挨拶を交わすことができるともいわれる。<sup>(18)</sup>

このようにクリスマス週間や復活祭の儀礼を見れば、昔話「黄金の火をもつおじいさん」がそれらと密接な関係にあることがわかる。祭りの火を焚く薪すらないという昔話の表現は、主人公の単なる貧しさを表すだけのものではない。人々は春の訪れとともに大地が蘇り、万物が生氣を取り戻すことを願い、地上で大火を焚いて太陽の力を強め、豊かな実りと幸福を祈った。祭りに焚く大火には、向こう一年間の生活がかかっていた。その火を焚くことすらできないという主人公の境遇はこのうえなく悲惨だったに違いない。それほど極度に困窮していた主人公の運命が、森の中でふしぎな老人と出会うことによって一変する。老人が管理する聖なる火が主人公に裕福

な暮らしを約束するのである。この老人は古代スラヴの神ヴェーレスの聖堂で永遠の火を管理する神官を想わせる。<sup>(19)</sup> ヴェーレスは家畜の守護神であると同時に、森の動物の主である熊の崇拜とも関わりがあり、つねに黄金と結びつく性質が認められる。<sup>(20)</sup> このようなヴェーレスの性格は昔話の内容とじつによく符合する。

スラヴでは家庭内の炉は女の火、地上の火であるのに対し、祭礼の火は男性原理とされ、天界と結びついていて、母なる大地や動物を懷妊させる力をもつとされる。昔話「黄金の火をもつおじいさん」の火はまさに男の管理する火であり、主人公が男であるのはそのためだろう。日本の「大歳の火」との最大の違いはそこにある。

ところで、ロシアには「黄金の火をもつおじいさん」と関連する話型がもう二つある。「うそ話」(CYC 1920 H\*)と「昔話の好きな金持ち」(CYC 1920 C)である。これら二つの話型と前者との違いは、語り手としての能力が富を獲得する条件になつていてある。

「うそ話」はロシアで三一話、ウクライナで二七話、ベラルーシで六話が記録されており、東スラヴ以外では確認し難い限り、クロアチア、カレリア、ウクライナ、モルドヴァ、マリ、チュヴァシ、ハンティ、ブリヤート、エヴェンキにある。粗筋は次のようなものである。

三人兄弟が森で野宿することになり、火種を求めて、焚き火をしているおじいさんのところへ行く。するとおじいさんはうそ話を語るか、歌をうたうことを条件に、火をやるという。兄弟たちはそれができず、背中の皮を切り取られる。弟は話の途中で「うそ

だ！」といわぬことを条件に話をはじめ、途方もないつくり話を

し、おじいさんに「うそだ！」と叫ばせて、火種を手に入れる。

森の中で火を焚いているおじいさんの正体について、スラヴの類話では何も語られないのがふつうだが、一話 カルナウーホヴァが記録したロシアの話では森の主レーシーになつてゐるのが目を引く。シベリア諸民族の類話ではこの人物は「ふしきな人食いじいさん」である。少し変わつてはエヴェンキの類話で、そこにはマンギという名の神話上の存在が登場する。これは天神ハダウの息子で、最初の死者であり、死後の世界へ通じる道をつけた人物とされる。このマンギが管理する火はやはり天上の火であり、祖靈の火であると考えられる。

もう一話、日本の「大歳の火」との関係で注目したいのは、西シベリアに居住するハンティの類話である。<sup>(22)</sup>主人公の獵師が「うそ話」をしたあと、老人に向かつて、「おじいさん、見る、天が落ちてくる！」と叫ぶと、突然この老人が金塊と化す。それを主人公が櫻に積んで帰るところで、めでたしとなる。ここでは火の管理者である森のふしきな老人が金塊と化して、主人公に富を授けるのである。

「昔話の好きな金持ち」は「黄金の火をもつおじいさん」や「うそ話」と違い、火をもらいにいくモチーフがなく、昔話の好きな王様（貴族）が、「自分が聞いたことのない話をした者に褒美をとらす」とおふれを出すところからはじまる。大勢の人が出かけていくが、みな王様の知つてゐる話しかできず、首をはねられてしまう。

そこへ一人の頓智者が現れ、途方もない作り話をして褒美を手に入

れるという筋書きである。

この話型は火を獲得するモチーフを欠き、森のふしきな老人がもはやただの話好きの王様、ないしは金持ちとなり、特權階級を風刺する話になつてゐる。分布はこの話型がもっとも広く、ヨーロッパ全土からシベリアに至る広大な地域を占めている。

以上、スラヴとシベリアの「大歳の火」を概観し、この昔話が儀礼と密接なつながりをもつてゐることを明らかにした。わが国の「大歳の火」と儀礼との関係についてはすでに多くの研究者によって指摘されているとおりで、日本とスラヴ、両方の話がそれぞれ自民族の儀礼や信仰と深く結びついて語られながら、相互によく似ているのはたいへんおもしろい。しかし前述したように、両者には一つ、大きな違いがある。それは主人公の性である。スラヴの主人公が男であるのに対し、日本の場合は女である。両者とも祭りとの強いつ結びつきをもちながら、前者の火が祭りの火の色彩が濃いのに対し、後者は家庭内の炉の火である。また、日本の話では火の管理が主婦権の譲渡と結合しているという特徴がある。両者は互いによく似てはいるが、やはり異なる土壤に育つたことは明らかであり、誕生についても目下のところ、異なるものと考えるべきだろう。

### 三 「稻羽の素兎」

「古事記」、「日本書紀」に記述された「稻葉の素兎」については、南方系とする説が有力だった。インドネシアなどに猿が鷦の背を渡

る話があることが早くから知られていたためである。このモチーフはアジア大陸の北東にも多くの類話があるが、その存在は日本ではこれまであまり知られていないかった。

六月二日に開催された本学会第二〇回大会のシンポジウムのため

に作成したレジュメに北方の資料を要約したところ、稻田浩二先生

から「『稻葉の素兎』試論—その通時的國際性—」(『梅花児童文学』第四号、一九九六年七月)をお送りいただいた。氏はアジアの南から北まで、太平洋に沿うようにして分布する「稻葉の素兎」を取り上げ、従来の定説を覆して次のように述べている。「その源流は東北アジア・東シベリアなどの口承民話と軌を同じくし、それらと同一の伝承圈に育ったものと考えられる」。筆者も同意見であり、ここに改めて手元の資料を提供し、シベリアの類話の特色について触れておきたい。<sup>(23)</sup>

資料1 オロチ

キツネが樹上のリスに子供をよこせ、よこさなければ木を切り倒すと要求する。リスが泣いているとアオサギが現れ、「キツネには斧はない」と入れ知恵する。腹を立てたキツネがアオサギを食おうとして尾に食いつくと、アオサギが舞い上がり、キツネは海に落ちる。キツネはアザラシに仲間の数をかぞえてやるといって岸まで並ばせ、アザラシの背を渡つて岸にあがり、アザラシを嘲笑する。アザラシがキツネに向かって、「おまえはずる賢いが、人間にはかなわない」と言う。アザラシの予言どおり、キツネは人間の罠にかかる。

別の類話では、キツネは陸に上がるとき、最後のアザラシの頭の上に不利便をして嘲笑つたので、アザラシが「おまえはクロテン用の罠にかかるだろうよ」といい、キツネはその言葉どおり罠にかかる。アザラシの模様はそのときにできたものだ。<sup>(24)</sup>

資料2 エヴェン

キツネが鷺の卵をだまし取るので、怒った鷺がキツネを海に浮かぶ小島へ連んで置き去りにする。キツネはワモンアザラシにどちらの仲間が多いかかぞえてやるといって一列に並ばせ、背を跳んで岸に渡るや、ワモンアザラシを嘲笑つて逃げる。

資料3 エヴェン

ホシガラスがキツネに卵を取られて泣いていると、キツツキが入れ知恵する。キツネが怒つてキツツキを食べようとするが、逆に捕らえられて島に運ばれる。キツネはワモンアザラシをだまして並ませ、背を渡つて陸に上がる。そしてトナカイを飼育している老夫婦の家にはいりこみ、トナカイを食い尽くして逃げる。秋におじいさんが自分で櫂を引いて遊牧に出ようとするとキツネが現れ、「悪いのはタイガのキツネで、わたしではない」とい、櫂に乗せてもらう。干した浮き袋と干したベリーを食べ、川の名を聞かれて、「始め川」「中川」「終わり川」などと答える。熊を殺しておじいさんに家へ運ばせ、おじいさんを縛つて熊の肉をひとりで食べて逃げる。鼠が皮紐を噛み切つておじいさんを助ける。おじいさんはキツネ道に仕掛け弓を仕掛け、キツネを殺す。<sup>(25)</sup>

資料4 ナーナイ

キツネが魔物を装つてモモンガを脅し、離を取る。アオサギがモモンガに入れ知恵する。キツネはアオサギに腹を立て、捕まえようとしてアオサギの足をつかむとアオサギが飛び立ち、キツネは海の島に落ちる。アザラシ（アブローリンのロシア語訳ではミミズ）に仲間の数をかぞえてやると言つて並ばせ、陸に渡る。キツネはカージーさんの罠に掛かって死ぬ。カージーさんはキツネの皮を剥ぎ、身は外に捨てる。捨てられたキツネは寝ころがつたまま泣き、雨、雹、霰、雪に「降れ」と叫ぶと、雨が降り、雹が降り、霰が降り、雪が降り、再び体毛が生えて蘇生する。キツネがカージーさんの家に行くと、人々はみな酔っ払つて寝ており、アオサギがいる。キツネはアオサギと一緒に飲み食いし、大声で騒ぐと、寝ていた人たちが起き出して棒で殴り掛かるので、キツネとアオサギは逃げ出す。別の類話では<sup>28</sup>、陸に渡ったキツネは再びアオサギに捕まつて殺されそうになり、「カージーさんの家の法事にいって、酒を飲んで仲直りしようじゃないか」と提案する。カージーさんの家にくと、みんな酒を飲んで寝ている。アオサギはキツネに酒を飲ませて酔わせ、大声で叫ばせてじいさんを起こす。アオサギは天窓から逃げるが、キツネは捕まつて皮をはがれ、肉は外へ捨てられる。キツネは呪文によつて雨、雹、霰、雪を降らせて、蘇生する。

資料5 ネギダール<sup>(29)</sup>

モモンガがキツネに子どもを取られて泣いていると、フクロウ爺さんがやってきて、「キツネには木を切り倒すことはできない」と入れ知恵する。キツネが怒り、フクロウの背中に飛び乗る。フクロ

ウはキツネをくわえて飛び立ち、海に落とす。キツネが泣いていると、ワモンアザラシが現れ、背渡り。キツネは陸に上がり、「おまえなんかとは親類ぢやない」と悪態をつく。怒つたワモンアザランは、「おまえは死ぬぞ!」という。キツネは「死ぬものか」といつて逃げ出し、お婆さんがサクランボの実を干しておいたところへやつてくると、実を食べて寝る。お婆さんがキツネを殺して皮を剥ぎ、帽子を作る。狼がその帽子を借りていつて返さないのでお婆さんが泣いていると、カラス、小鳥が飛んでくる。小鳥が帽子を取り返しにいき、一軒の家にはいると、キツネ、狼、カラス、ケナガイタチ、それに爺と婆がいて、ツブガエルが巫術をしている。小鳥が代わつて巫術をして窓から飛び立つと、爺は「これはいいシャマンだ」といい、小鳥に帽子を与える。小鳥がその帽子をお婆さんのところへ持つていくと、お婆さんはお礼にナイフと針を与える。

資料6 ウィルタ<sup>(30)</sup>

キツネが海岸を歩いていると、鳥がキツネをつかんで沖の島に落とした。キツネが海岸で泣いていると、フイリアザラシが現れた。キツネはアザラシの数をかぞえてやるといつて並ばせ、背をわたつて岸に上がつた。キツネは海岸で貝を見つけて食べようとすると、貝が「競走で負けたら、食われてやる」という。貝はキツネの尻尾に捕まつて競走に勝ち、キツネは貝を食べ損なう。このあと「貧乏じいさん」の昔話が結合し、キツネは死んだなりをしているおじいさんを家に連んでやつて殺される。

資料7 ニゲフ<sup>(31)</sup>

鷺がキツネをつかんで島に落とした。キツネが泣いているとアザラシが出てきて、「なぜ泣くのだ」と尋ねた。「泣いているのではなく、歌をうたっているのだ。みんな聞きにこい」というと、アザラシが集まってきた。キツネはアザラシの頭の上を跳んで数をかぞえ、陸に上がるときに、いちばん近くにいるアザラシの目に爪をかけて上がった。そして罠にかかるて死んだ。

資料8 コリャーク<sup>(32)</sup>

キツネが樹上にある鷺の巣を見つけ、草の茎を耳に挟んで木の幹を叩き、「卵を投げてよこさなければ、木を切り倒す」と脅して鷺の卵をだまし取つたうえ、鷺を嘲笑つた。鷺が怒り、キツネをつかんで離れ小島に落とした。キツネが我が身を嘆いて呪文を唱えると、アザラシやセイウチやクジラが島の近くに現れ、「何をいつている」と尋ねた。キツネはとぼけて、「海と陸とどちらにたくさん動物が住んでいるだろう」といった。海獸たちが海だと答えると、キツネは彼らを水面に並ばせて数をかぞえる振りをし、背の上を跳んで陸に渡つた。家に帰る途中、キツネは従兄弟の熊に出会い、「地上でだれが恐い」と尋ねた。熊が「だれも恐くない」と答えると、キツネは獵師を連れてきた。獵師が弓で熊を射ると、熊が怪我を負つた。キツネは熊に傷の手当をしてやるといい、尖った石を突き刺して熊を殺し、熊の肉を子どもたちのところへ持ち帰つた。

資料9 コリャーク<sup>(33)</sup>

キツネが川岸にいると、川を流れいく丸太の上にカモメが止まっていた。キツネは丸太に飛び乗ろうとして川に落ちた。キツネ

は海に流れされ、アザラシに仲間の数をかぞえてやるといって岸まで並ばせ、背を渡つて岸にあがつた。そして濡れた毛皮と尻尾を脱いで干した。

資料10 イテリメン<sup>(34)</sup>

嫁にいきたいと思っているキツネが岸で魚のほつちやれを捨て、自分の赤ん坊だといってあやしていると、アビ（水鳥）の群れが川を泳いでくる。キツネは一羽のアビに、わたしはあなたの妻で、これはあなたの子だから一緒につれていいってくれというが、アビは去る。キツネはカモメの群れにも同じことを言い、筏に乗せてもらう。深いところまでいくとカモメが飛び立つてしまい、キツネは海に落ちて溺れそうになる。なんとか自力で岸にたどり着き、毛皮と目玉を干して寝る。そこへクトフ（ワタリガラスで、創造神）がやつてくる。クトフはキツネをからかってやろうと思い、川へ行つて水を口にふくみ、裸で寝ているキツネにかける。キツネは驚いて飛び起き、あちこちにぶつかりながら逃げる。クロマメノキに実をもらつて目にはめると、まわりが青く見える。コケモモに実をもらつてはめると、まわりが赤くなる。ガンコウランに実をもらつてはめ、毛皮と目玉を見つける。キツネは体じゅうすりむけて痛い。クトフが家に帰つて、妻のミチにこの話をすると、ミチが夫を責める。

資料11 アジアエスキモー<sup>(35)</sup>

キツネが舟に乗せてもらい、太鼓をたたいて歌をうたい、漕ぎ手たちの音頭をとるうち、気がつくと水の中にいた。舟だと思つて、たのはマガモの群れだったので。キツネは岸に向かつて泳いだが、

後ろからひっぱるもののがいるので振り返ると、自分の尻尾だった。やつと岸にたどり着き、濡れた毛皮と目玉を干して寝た。そこへワタリガラスがやってきて、キツネの目玉を食べてしまった。だからキツネはいまでも自分の目玉を探しているんだ。

別の類話では、キツネは手探りで目玉を捜し歩くうちに死んでしまう。

### シベリアの「稻葉の素兎」の特徴

トゥングース系の民族には、狡猾なキツネが他の動物を連続して語られることが多い。また導入部に、キツネが樹上の鳥に、「卵（または雛）を投げてよこせ。よこさなければ木を切り倒す！」といつてだますモチーフが置かれているのも、この地域に共通する特徴である。他方、カムチャタカ半島からチユコトカ半島にかけて居住するイテリメン、コリヤーク、アジアエスキモーなどにおいては、カモやアビといった水鳥が隊を組み、舟や筏に見せかけてキツネを海に落とすモチーフから物語が始まることもある。いずれにしてもシベリアの話は、キツネが鳥によつて運ばれ、海中、または沖の島に落とされるモチーフが発端となり、「陸獣と海獣の数かぞえ」「背渡り」へと続くが、日本の話はこの発端のモチーフを欠き、主人公が島にきたいきさつの説明がなく、いきなり「陸獣と海獣の数かぞえ」と「背渡り」から始まる。

さて、まんまと海獣をだまして陸に上がったキツネは、トゥン

グースでは人間の罠に掛かって皮をむかれるのに對し、カムチャトカ半島、チュコトカ半島では、キツネはずぶ濡れになつた毛皮を自分で脱ぎ捨てて裸になる。そして毛皮と目玉を干して寝ていると、ワタリガラスが通りかかり、目玉を食べたり、裸の体に水をかけたりしてキツネを苦しめる。このワタリガラスのいたずらには「古事記」の八十神の所業を想わせるものがあつて、興味をそそられる。

ここでシベリアの類話の構成をまとめてみると、トリックスターであるキツネと鳥類との葛藤に始まり、沖へ運ばれて海獣との葛藤となり、陸に戻つて人間（または天神）との葛藤で終わる。

トゥングースの話で注目されるのは資料4のナーナイの話である。そこではカーディさんの罠に掛かって皮をはがれて死んだキツネが泣いて呪文を唱えると、裸の体の上に雹や雪や雨が降り、毛が生えて蘇生する。ここには日本のオホナムジ（オオクニヌシ）のように、赤裸の主人公に救いの手を差し伸べてくれる人物は登場せず、主人公は呪文を唱えて自然界に働きかけ、自分で自分を蘇生させる力をもつてゐる。すなわち、ナーナイのキツネは死に瀕した病人であると同時に呪医でもあり、日本の兎とオホナムジの役を一人で演じてゐる。

また、キツネにだまされたことを知ったアザラシが、「おまえは罠にかかる」と予言し、その予言が的中するのもトゥングースの特色である。日本の兎は自分を救済してくれたオホナムジに感謝し、「八上比売を得じ」と未来を予言する。このように一方は死を、一方は恋の勝利を予言していく予言の内容は違うが、予言とその的中

で終わる点では一致する。

以上みてきたように、シベリアには「背渡り」やチーハ並んで、主人公が皮をはがれるか、あるいは自分が皮を脱いで裸になるとチーハ、裸の体に毛を蘇らせるモチーハ、やらないに予言とその的中など、多くの共通点があり、日本の「稻羽の素兎」が東南アジアの話よりシベリアの話に一段と近いことは明らかである。

それにしても、この話が日本では書承のみで、民間で伝承された痕跡がないのはなぜだろうか。この点に関して稻田氏は、「稻羽の素兎」が「巧みに、あるいは民間の口承を吸收したといふに因するかと思われる」と述べているが、はたしてそれだけだろうか。この謎の解明は話の源流や伝播経路を特定できるほど待つはかなないかも知れぬ。

- (1) СУС 『東スラヴタイプインデック』 (一九七五年, № 11  
>, 277-278)
- (2) Ю. Н. Дьяконова, Якутская сказка, Наука, Л., 1990, стр.  
160
- (3) 伊藤清司『中国民話の旅かく』 №НК" 277, 一九八五,  
五六頁
- (4) 崔仁鶴『韓日昔説の比較研究』 三井書店, 一九九五, 一  
九六頁
- (5) 飯農道男「貧乏人と金持と・大歳の客」『口承文学研究』第  
一四四, 一九九一
- (6) Русский фольклор в Литве. Исследование и публикация  
Н. К. Митропольской. №119, Вильнюс, 1975, стр.  
294-295
- (7) K. Arajs. A. Medne. The Types of the Latvian Folktales.  
Riga, 1977
- (8) Эстонский фольклор. Таллин, Ээсти раамат, 1980, стр.  
276
- (9) Сказки и песни Вологодской области. №17, Областн-  
ая
- (10) В. Н. Добровольский, Смоленский этнографический  
сборник, Ч. 1., Спб. 1891, стр. 635-637
- (11) Сказки Верховинны. Закарпатские украинские народные  
сказки. Карпаты, Ужгород, 1970, стр. 67
- (12) Записки Нauкового Товариства имени Шевченка. 1899,  
Т. XXIX, Львів, Іван Верхратський, Зналоби для пізання  
145-146
- (13) П. А. Гнедич, Материалы по народной словесности Пол-  
тавской губернии. Роменский уезд. Вып IV, Сказки,  
легенды, рассказы. 1554, Полтава, 1916, стр. 91-93
- (14) Н. Е. Ончуков, Северные сказки №113, СПб, 1908
- (15) Ю. В. Иванова, Обрядовый огонь. В кн.: Календарные  
обряды и обряды в странах зарубежной Европы. Наука,

- M., 1983, стр. 123–4
- (16) С. М. Дмитриева, Фольклор и народное искусство русских Европейского Севера, М., 1988, стр. 27
- (17) В. К. Соколова, Весенне-летние календарные обряды русских украинцев и белорусов. Наука, М., 1979, стр. 116
- (18) Славянская мифология. Энциклопедический словарь. ЭЛЛИС ЛАК, М., 1995, стр. 299–301
- (20) В. Г. Власов, Формирование календаря славян. Ранний период. В кн.: Календарь в культуре народов мира. Наука, М., 1993, стр. 115
- (20) Славянская мифология. стр. 74
- (21) И. В. Карнаухова, Сказки и предания северного края. №145. Академия, М.–Л., 1934
- (22) Сказки народов Севера. Гос. изд-во худ. лит. М.–Л., 1951, стр. 74
- (23) Сказки дружной семьи. Малыш, М., 1974
- (24) В. А. Аврорин и Е. Г. Лебедева, Оротские сказки и мифы. АН СССР. Новосибирск, 1966, стр. 42
- 『トトナムの風習』小樽商科大学附属図書館蔵  
「トトナム」 | 頃回記
- (25) Сказки народов Севера. Изд-во худ. лит., М.–Л., 1951, стр. 286
- (26) Сказки народов Севера. Изд-во худ. лит., М.–Л., 1951, стр. 291
- (27) В. А. Аврорин, Материалы по нанайскому языку и фольклору. Наука, Л., 1986, стр. 68
- 風間伸次郎' | 九九五' | 一八頁
- (28) 風間伸次郎' | 九九五' | 一八頁
- (29) В. И. Цинцкус, Негидальский язык. Наука, Л., 1982, стр. 132
- 風間伸次郎' | 九九五' | 四六頁
- (30) 池上一郎『ハイルタロ頭文藝原文集』網走市北方民族文化保存協会 | 一九八四 | 四六頁
- (31) 高橋盛孝「キラヤク族の民謡」『稚語研究』第一期第1号 | 昭和11年 | 八頁
- (32) W. Jochelson, The Koryak. P.I. No. 36, Leiden–New York, 1908
- (33) Ворон Кутха. Малыш, М., 1974, стр. 28
- (34) Сказки и мифы народов Чукотки и Камчатки. Наука, М., 1974, стр. 506
- (35) Эскимосские сказки и мифы. Наука, М., 1988, стр. 16  
(アーチー・マーフィー)